

ローテクは、おもしろい

前号では、シャトル織機について書いたのですが、T先生から文章中に（ ）が多くて読みにくかった、とお叱りを受けました。読んでいただいていると、感謝するとともに、反省しながら…。わかりにくいことばは、註としてまとめます。

さて、私は、手仕事や伝統産業的につくられたものが好きです。焼き物、塗り物、織物
挽物※1、染め物、鋳物※2…

こうした物に惹かれるのは、手作りのものは、味があっていい、と言う気持ちもあります。また、柳宗悦※3の言う民芸品の「用の美」にも共感し、その地に民藝館があれば、必ず訪ねます。駒場の日本民藝館はもちろん、松本民藝館、出雲民藝館、富山市民藝館…

ただ、私がそれらに惹かれるのは、ローテクのおもしろさもあると思っています。手仕事やそれに近い工芸品の工房を訪ねると、まず原料がそこにあり、その原料のどんな性質をどう利用して、そのものを作るかの工程がわかります。



現代の工業製品では、その原料や、作る工程はどんどんブラックボックス化されて、私たちは、品物だけを目にし、使うわけです。もちろん、それで困る、というわけではありませんが、そのものの基本的な原料やその性質、そして作り方を知っている、それだけで、少し「目利き」になって、そのものもいい品かどうかを、ちょっと見抜けるようになります。

焼き物で言えば、まず磁器か陶器※4か？ろくろ成形（←写真 韓国・イチョンにて）か、型抜き、鋳込成形か？絵柄は、手書きか、プリントか？…

もちろん、少しいいものがわかってくると、買い物も楽しくなります。

また、少し社会科っぽく言えば、基本的な原料や作り方がわかっていると、産業革命・近代化の中で、どこがどう変化したのか？も見えてくる。

織物が、地機から高機※5、そこに飛び杼が入り、自動織機、柄の出し方も、天引からジャガード、縞からドビーへ…。そしてシャトルレスへ？

ローテクのものの作りを訪ね歩くこと、まだまだ興味がつきません。

※1 挽物（ヒキモノ） 木をろくろで挽いて、お盆やお椀をつくる

※2 鋳物（イロモノ） 鉄を高温で溶かし鋳型に入れて鍋などをつくる（南部鉄瓶など） 刃物は鍛造＝鍛冶屋さんがたたいてつくる

※3 柳宗悦 暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品に「用の美」を認める民芸運動の創始者

※4 磁器と陶器 陶磁器のうち、白くて薄いものが磁器 厚手のものが陶器 原料も違う

※5 地機と高機 経糸に腰に巻いた腰板でテンションをかける地機（イラスト↑）高機は木（男巻）に巻く

